
異界の聖戦

電波良好

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異界の聖戦

【Nコード】

N3576F

【作者名】

電波良好

【あらすじ】

何の変哲も無かった筈の少年レオンは、世界を懸ける聖戦に挑む事に……。

Prologue of Prologue

太陽が地面を焦がす八月、欧米のとある国。

「あち……」

レオン「クリオール」の頬を汗が伝った。

「よおレオン！ 調子はどうだ？」

「見りゃ分かるだろーが。相変わらずだよ」

レオンは魚の入った網を掲げ、苦笑いを浮かべる。

両親のいない彼は物心ついた頃から祖父母に育てられていて、少しでも迷惑を掛けない様にと自ら漁場で働いていた。

太陽を見上げ、レオンは一つ溜息をつく。

「ちつ、この暑さじゃ魚がダメになっちまう」

レオンが再び前を向き歩き出そうとしたその時、ふと辺りは日陰に覆われた。

先程までの暑さは鳴りを潜めて風が吹く。

再び真上を見上げると、レオンはそれを視界に捉えた。

『モンスター』

衝撃と混乱の入り混じる頭の中でそれを表現するには、それが最も相応しかった。

第1話「合成種族」

空から降る異形の生物。突然の出来事にレオンの四肢は固まり、ただただ黙ってそれを見上げている。

死ぬ。レオンはそう直感した。その直感は、異形の生物が見るからに膨大な質量を秘めていた事に起因する。

しかし轟音と共にそれが地面に墜落した時、レオンの体はそこには無かった。

「なっ……!？」

レオンは予期せぬ移動に目を丸くする。その後、自らの体が何者かに抱えられている事に気付いた。

「誰だ!？」

「落ち着きなさい。私は味方だ」

長めの銀髪に薄いフレームの眼鏡。男はこの状況でも静かに、冷静に言葉を連ねる。

『ガLLLLLLLL……!!!!』

その巨大な唸り声は地面を揺らし、レオンの脳に響く。

「やれやれ、少しは場所を考えて下さいよ。一般人を巻き込む訳にはいかないでしょうが」

銀髪の男はゆっくりとレオンをその場に降ろした。

異形の生物はもう一度、大きく咆哮を上げる。三メートルはあるうかという巨体、鋭い牙、厚い体毛。

銀髪の男はそれと正面から睨み合い、そしてゆっくりと腰元の剣を抜いた。

「ただの下級キメラか……」

（剣……………！！）

異形の生物は鋭く尖った右手で銀髪の男を襲う。その足音は地響きを引き起こし、その眼光はただ破壊を求めている。

『ガアアアア……………！！！！』

男の銀髪が風で靡いたかと思えば、異形の生物の体は真つ二つに引き裂かれた。

土台を失った上半身が地面に堕ち、司令部を失った下半身が少し遅れてゆっくりと地面に倒れ込んだ。

「……………！！」

レオンは声を失い、その場に尻餅をついた。

銀髪の男は振り返り、その様子を見て優しく微笑む。

「やあ。驚かせちゃったかな」

「……………、歴代ランキング一位」

「はは、ごめんごめん。ここじゃ何だし、ちょっと場所を変えよう」

古びれた内装、寂れた空気。レオンが常連として店主と顔馴染みになっている酒場に、レオンと銀髪の男はやってきた。

「僕はアルロワ＝リバーウッド。よろしく」

「……レオン＝クリオールです」

そう言って、レオンはアルロワの差し出した右手をとる。

「さっきの……何だったんですか」

「うん、当然の疑問だね」

アルロワは爽やかに笑い、コーヒークップをテーブルに置いた。

「……それを話すには、まず世界の歴史について知ってもらわないとね」

「歴史？」

「約百年前、この世に悪魔と呼ばれる種族が誕生した。悪魔は類を呼び、共に世界を滅ぼそうと人間を襲い始めた」

「世界を……」

「更に悪魔はその過程で合成種族キメラを創り出し、最早生身の人間に対抗する術は無かった」

レオンは静かに喉を鳴らした。

「……お？ 『じゃあ何でまだ世界が滅びてないんだ』って顔だね？ レオンくん！」

「あ、まあ……。いや、いやいや、て言うか、悪魔なんかこの世に存在する訳無いじゃないですか！」

アルロワはまたコーヒーカップを口元へ運び、中身を一気に流し込む。

「悪魔っていうのは、百年前の人々が彼らを恐れてつけた呼び名なんだ。それ程悪魔の存在は脅威なのさ。今レオン君が想像してる悪魔とは違うよ」

「……じゃあ、今までどうやって悪魔から世界を守ってきたんですか？ その悪魔は百年も前から存在しているんですよね……？」

レオンは恐る恐る尋ねる。それを見てまた、アルロワは優しく微笑んだ。

「悪魔を抑える為、神はこの世に『神の使徒』を産み出した。その数108人。神の使徒は皆生まれながらに特殊な能力を持っていて、彼らだけが唯一悪魔達に対抗する事が出来たんだ」

「神の使徒……」

「そう……悪魔が勝てば世界は滅び、神の使徒が勝てば世界は守られる。神の使徒vs悪魔の、世界を懸けた聖戦だ」

「そしてレオンくん。君こそ、悪魔から世界を守る神の使徒なんだ」

レオンの持つコーヒーカップの中身が静かに揺れた。

第2話「使徒のめざめ」

「俺が……………？」

「そうだ。レオン＝クリオール」

レオンは混乱している頭の中で、必死にアルロワの話を整理していた。

「いやっ…………、それ何かの勘違いですよ！ 俺特殊な能力なんて持ってないですし…………」

「そう…………厄介な事に108人の神の使徒が全員能力に目覚めている訳では無く、多くは自らの能力に気が付いていない場合が多い。だから、全世界に点在する神の使徒の大半はまだ発見されていないんだ」

「…………、そんな事言われても」

7

その時、酒場の天井を巨大な豪腕が打ち砕いた。

その豪腕は酒場の大半を潰し、柱を失った天井が崩れ落ちる。

「……！ 合成種族…………！」

「えっ、これもさっきの!?」

「ああ…………、どうやらキメラは君がお目当てらしい」

「そんな…………！」

レオンとアルロワは酒場を飛び出し、広場へと出た。
キメラはその巨体を揺らし、二人の後をついてくる。

「アルロワさん！ またさっきみたいに倒して下さい…………！」

レオンはアルロワの方を向いて叫ぶ。
しかしアルロワは、少し考えた後広場のベンチに座り込んでしま
った。

「アルロワさん!!?」

「んー……………さっきはね、君が神の使徒だと思ったから助けたん
だ」

「!!!??」

「君が神の使徒じゃないなら、僕が君を助ける理由は無いんだよね」

アルロワはそう言って冷たく笑った。

「ふざけるな!!!!」

レオンはアルロワの胸倉を掴み、荒々しく叫んだ。

「アンタがあいつを止めなきゃ、沢山の一般人が巻き込まれるんだ
ろ!??」

「んー……………かもね」

「だったら!! 俺が神の使徒だとか関係なく、アンタはあいつを
止めなきゃいけない筈だ!!」

そう言つと再びアルロワは小さく笑い、レオンの目を正面から見
つめた。

「君があいつを止めれば良い。……………『神の使徒』、レオン!!ク
リオール」

「バカな……………」

「どっち道、君が逃げれば僕も逃げるよ。そうすれば、少なくとも

「この辺りの人々は相当死ぬだろうね」

「ッ　　！！」

「君が、人間を救うんだ。それが神の使徒の宿命だ」

「……………！！」

『ガLLLLLLLLLLLL……………！！！！！！』

キメラは天を仰いで咆哮を上げ、レオンに向かって襲い掛かる。

ゆつくりと振り向いたレオンの目には、確かな決意と覚悟が秘められていた。

レオンは右手をキメラに向け、左手で右手首を支える。

『“灼熱の業火”！！！！』

レオンの右腕が眩い光を放ち、そして右手の掌から火柱が飛び出した。

「！！！！」

その炎はキメラを貫き、キメラは苦痛の断末魔を上げる。

キメラがゆつくりとその場に倒れこんだ時、レオンはアルロワの方を向き直した。

「分かった……。俺が神の使徒だってんなら、バケモノだろうが悪魔だろうが全部止めてやりますよ」

「俺が、世界を救います」

アルロワは、嬉しそうに微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3576f/>

異界の聖戦

2010年10月15日13時13分発行